

批評・紹介

論語と孔子の思想

津田 左 右 吉 著

本書は津田博士の數多い著作の中で、「道家の思想とその開展」「左傳の思想史的研究」に續いて、第三に現はれた長編の力作である。

緒言と結語を除き、篇を分つこと五、第一篇「世に傳へられてゐる孔子のことば」では、更に之を、「論語の」と關係のない孔子のことばと、「論語の」と關係のある孔子のことばの二章に分ち、孔子の言葉が時代と共に追加されて來たことを、時代的には逆に漢代から始めて古代へ遡り、現今の論語が全部、孔子の思想であるとは云へぬことを考證する。第二篇「論語および孔子のことばの傳承」では、前漢時代に於ける論語の傳承から遡り、戰國時代に於いてまだ論語の形に經められない、孔子の言葉の傳承を探らうとする。第三篇「論語の形態とその内容」では、論語の文章の形式、修辭、人の呼稱の用法などからその形態を論じ、次は論語の内容を、道德に關するものと政治に關するものに區分し、なほ孔子の思想に調和しないやうに見える簡條を列擧する。第四篇「論語のできたかみちすぢ」では以上のことから歸結して、論語の成立を論じ、孟子以後になつて附け加へられたと思はれる部分と、孟子以前に出來てゐたと思

はれる部分とがあることを指摘し、論語の編纂に一貫した規則のないこと、各篇に出て來る弟子の名前などには深い意義を持たぬことを論じ、此處からして從來の、孔子死後の儒家の學統を考へて、之と論語の成立との間に密接な關係を認めやうとする、例へば武内義雄博士の説などと、反對の立場に立つことは注意さるべきであらう。最後の第五篇「論語と儒家の學」は博士得意の埒場で、從つて最も精彩に富む。始めに孔子の思想を概觀し、それが孟子へ、更に荀子へ、最後に漢代の儒家へ、如何に移つて行つたかを論じ、次に孔子をも含めて儒家一般の學說の特長、更には儒家をも含めた諸家に共通なシナの學問の傾向を特質づけて此篇は終る。

本書を讀んだ後の感想を率直に云ふならば、それはあまりに論語の周圍をぐるぐる歩き廻り過ぎてゐるといふことである。題して「論語と孔子の思想」とある以上、本書の核心は型式上、第三篇第二章「論語の内容」と、第五篇第一章の内「孔子の思想」の兩所にあると認めねばならぬ。兩者を合して全書の十分の一に満たないといふ分量の點は暫く措き、これで果して讀者に、孔子の思想傾向全體の把握が出來たであらうか。

先づ「論語の内容」についてであるが、一體論語は甚しく難解な書なのであるが、著者は案外に甘く見くびつて居るのではなからうか。例へば著者は蕞問篇に於いて、孔子が管仲を仁者としてひどくかをほめてゐる、と云はれるが、之は「如莠仁。如其仁」の句を、普通の說に従つて、「その仁に如かんや、そ

の仁に如かんや」と讀んでゐるのであらう。所が此句については古來議論のある所で、既に徳川時代に日尾瑜の管仲非仁著辯（日本儒林叢書解説部第一所収）があり、近くは狩野直喜博士に「孔子と管仲」（支那學文藝所収）があり、何れも此所を、「その仁を如何せん。その仁を如何せん」と讀むべきを教へてゐる。斯く解すれば論語の他の部分とも何とか調和せしめ得るのであるから、定説としては當にこの讀み方を採るべきであらう。この外にもなほ意味の判然せぬ所が數多く殘されてゐる。そして論語が分り憎くなつた原因の一つは、後世の儒家が、孟子や漢代の儒家などの考へ方を以て、論語の容易に讀める所だけを讀んで了つて、それでは讀めない殘りの部分をいい加減にこぢつけて済した爲ではあるまいか。津田博士は、「子罕言利。與命與仁」の中で、仁と共に利を言ふことは考へられるであらうかと疑つて居られるが、之は自ら警戒しつつも、知らず知らず、孟子の「何ぞ必ずしも利を言はん」の考へで讀まうとした爲ではないか。孔子の弟子に子貢のやうな、貨殖傳中の人物があつたとしたならば、孔子が時に利を言つたことも考へられ、只それが仁に違はぬことを條件としたならば、それでよく、さう潔癖に咎め立てする必要はあるまい。論語はある場合には孟子で讀むことも有益であらうが、何よりも大切なことは出来るだけ論語は論語で讀むことである。その爲には所謂考證的な讀み方と、思想的な讀み方とは、究極に於いて同一のこととならなければならない。そして論語の本當の讀み方を發見

することが、何よりの急務なのではなからうか。

次に「孔子の思想」の場合であるが、著者は餘りにも疑義に論語の中から疑はしい部分を排除して、孔子の思想を内輪に評價しやうとした結果、思想的の當然行く可き方向、即ち論語的な物事の考へ方、孔子的な論理の把握について、あつさりと言明をつけて了つたかに思はれる。そこで孔子の思想を道德的な方面、政治的な方面、その他に分類して夫々を小さな風呂敷に包み、この遺産を後世の儒家が如何に相續して行つたかが、以下に述べられてゐる。既に孔子に論理がないから、其後の儒家の思想には論理的な發展がない。只時勢に應じて遺産が増えたり減つたりするだけのことである。

思ふに春秋末から戰國を経て漢初に至る間は、全般的に見て案外思想の自由な時代であつた。さればこそ色々な學派の對立も見られる。斯ういふ際には、後進の學派なり學徒なりは、常に先進の學派學說の弱點を突き、又一方では自派の學說の弱點を補強して他に對抗しやうとし、そこに思想の論理的發展が見られるのが普通である。孔子の場合、墨家は確に孔子を目標として攻撃を加へたこと、なほ孟子が墨家を攻撃したと同様のものがあつたであらう。そして孟子は墨家を攻撃しつつも、矢張りその思想に於いて墨家から影響を受けた所なしとせぬ。斯ういふ急所を轉換點として思想の論理的發展を跡づけたならば、反つて孔子の思想そのものがもつと分明して来るものと思はれる。例へば墨家の天と命についての論說から、孔子と孟子と

の天命觀の相違が何はれやうと思ふ。

若し古代史研究家を釋古派と疑古派に分類することが出来るならば、津田博士の立場は正に疑古派のそれであると云ひ得よう。而して本書は津田博士の立場としては一應完成したものと云へる。只、疑古派に免るべからざる特質として、破邪に急であつて、顯正に略である。要するに本書は、疑古派の長所を遺憾なく發揮しつつも結局その効力に一定の限界があることを如實に示したものに外ならぬであらう。

なほ本書を讀む初學者の爲に二三の參考書を附記して置くのも無駄ではあるまい。論語の本文を何で讀むかが先づ第一の問題であるが、單なる讀み下し文を國譯と稱するならば、寧ろ原の漢文で讀むに如かず、少し古いが根本通明博士に「論語譯義」があり面白く讀める。但しこれには専門家の側から異議が出るかも知れぬ。經典以外の孔子の言葉と稱するものを集めた本に清の曹庭棟の逸語があり、之も古いが、遼陽隆吉博士に「逸語訓譯」がある。孔子弟子の事迹は馬綱の經史卷九十五に、纏められ、俗書と題けられ乍ら、も薛應旂の「四書人物考」は便利である。なほ武内義雄博士が定本を造つて國譯された岩波文庫本論語及び津田博士とは別の立場から論語の成立を考證した「論語之研究」が必讀のものなるは云ふまでもなからう。

岩波書店發行、大正版、五三頁、外三三頁、價七十圓

(宮崎市定)

科

舉

宮崎市定著

A5版二八八頁 昭和二十一年十月二十日
秋田屋發行 定價 三 十 圓

科擧は中す迄も無く、中國に於て隋代より清朝晩年まで千三百有餘年間實施され來つた、高等官資格試験制度である。多少の變遷はあるとしても千三百年間繼續されたと言ふ此の事實に對しては、單に官吏登庸法と言ふ問題に止らず、更に直接間接影響を受けた種々の問題が、これに伴つて提起される。例へば近世獨裁君主制と科擧との關係、黨爭問題或は異民族の漢人統御策としての科擧制度等の如き政治史的意義、或は又中世貴族に對する所謂近世士大夫階級乃至讀書人階級としての社會史的意義、更には文學、史學、宗教、哲學等の文化史的、思想史的立場に於ける科擧のしめる地位等々、多々問題は含まれてゐる。従つて科擧こそ中國の官制のみならず、中國そのものを知らねば、換言すれば、實は科擧を知らずしては、中國は語り得ないのである。しかるに從來一般國人が中國問題を論ずるに當つては、あまりに獨斷的であり、上すべりのであつて、かかる重大なる問題を包含せる科擧に對しても、ただ漠然とその存在を知るに過ぎぬ程で、今迄にその本質にふれた専門書らしい専門書が出されなかつた。この事は一見不思議に見えて、實は問題が餘りに重大である事に、その原因が存するのである。この今迄に當然發表さるべくして、發表されなかつた問題が、此